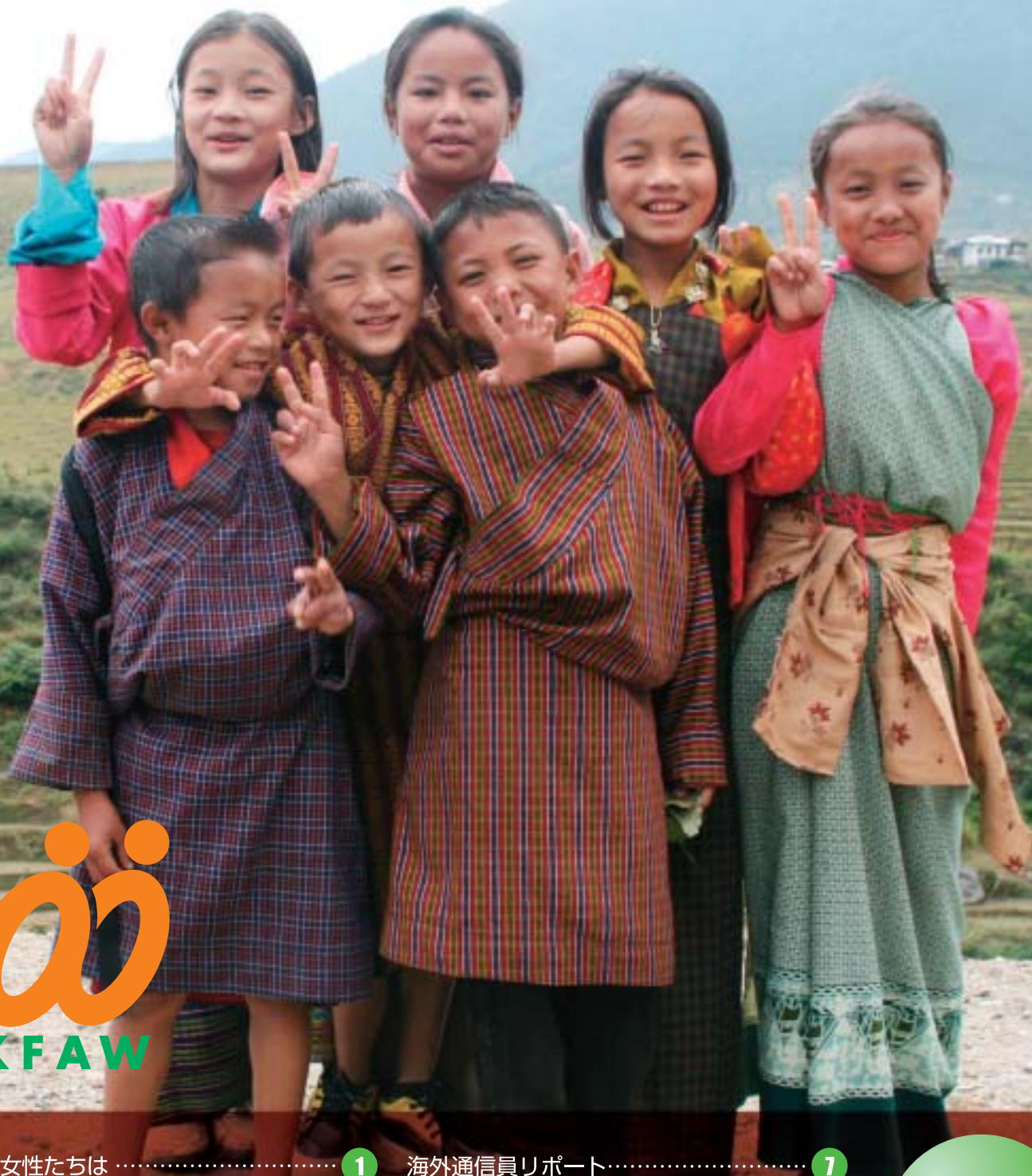


# Asian Breeze

エイジアン・ブリーズ53号・平成20(2008)年6月発行 年3回発行



いま、女性たちは	1	海外通信員レポート	7
誌上セミナー	3	第18期海外通信員を紹介します	9
第52回CSWに参加して	4	フォーラムの窓	9
ユニフェム北九州講演会	5	インフォメーション	11
元JICA研修生報告	6		

NO. 53  
JUNE 2008

## いま、女性たちは

幼い頃の私は、活発で明るい子ではありませんでしたが、特にスポーツが得意なわけでも、勉強が得意なわけでもありませんでした。自分に自信を持つことができず、自信を持つための何かをずっと探していました。そんな時に相談相手になってくれた、体育の先生の言葉をきっかけに「私のなかにも、自分にしかないものが必ずある。何事にも一生懸命取り組もう」という気持ちが生まれました。そして、誰もやりたがらなかった中学校での800m走でいい結果をだすことができ、走ることに對して明確に自信を持つようになりました。そこから私の陸上選手としての人生が始まりました。

その後、私は女子マラソンで2回オリンピックに出場しましたが、オリンピックにおいてこの種目ができるのは1984年のロサンゼルス大会からです。それまでは、マラソンは女性には体力的に過酷だという判断で開催されていませんでした。しかし、かつては男性しか出場できなかったボストンマラソンという歴史的な大会に、どうしても参加したいという女性が偽名を使って出場しました。運営側がレース途中でそれに気づき、彼女を退場させようとしたのですが、参加していた男性ランナーの助けもあって完走することができました。これをきっかけに女性の参加が認められるようになり、オリンピックでの女子マラソン開催につながりました。無理に同じにする必要はありませんが、今では男女間の種目の差もなくなってきています。女性スポーツの歴史はまだ浅いですが、その世界はこれからも広がっていくと思います。

競技において多くの女性選手が活躍する一方で、運営組織などにおいては、まだまだ女性の参加が少ないように思います。しかし、男性と女性は生物学的にも異なっており、何にそれぞれの持つ特性が生かせるのかも違います。違うからこそ、お互いが存在する意味があります。ただ、その違いを差別にしていけないだけです。スポーツの世界に限ったこ

とではありませんが、参加したいと思っているのに、女性というだけでその機会が与えられないことは問題です。しかし、時代が変わっていく中で、男女の扱いの差を埋める段階の一時期的なものである場合は別として、女性自身が、女性としての特別扱いを喜ぶことには違和感を覚えます。女性であるということに固執して物事を考えていくのではなく、1人の人間としてその能力が正しく評価されるよう努力すべきだと思います。

長い間日本では、スポーツは純粋なもので、お金が絡むべきではないというような考え方がありました。そのような状況の中、私は日本初のプロランナーとして活動を始めました。批判もありましたが、世界にスポーツを生きる手段としている人が増えている中で、日本も変わらざるを得なくなる、変えることができる

と信じていました。後に続く人たちのためにもという思いもありました。そして今では、当たり前前にプロ活動ができるようになりました。スポーツの世界でなくても、まだまだ日本ではお金を稼ぐのは男性で、女性はお金と結びつかないことが崇高であるかのような風潮もあります。しかし、ビジネスは自分の能力に対する対価で、その形をとれないことで能力を発揮できないこともあります。無償奉仕には限りがあり、甘えもできます。世の中のシステム以前に、その意識を変えることが必要だと思います。

私は、自分自身も含めたアスリートたちのマネジメント支援のために、ライツという会社を設立しました。アスリートは単に競技性だけを追求するのではなく、競技に對して必死になってがんばっている中で学んだり、経験したりしたことを自分の生き方のメッセージとして伝える意識をもつことが必要だと思います。そして、その人たちを支える存在をもっと作っていかねければとも思います。アスリートとしての競技人生は決して長くはありませんが、その短い期間に人一倍いろいろな経験をしています。そ



Yumiko Arimura

国連人口基金親善大使  
有森 裕子

それを単なる記録や経験で終わらせてしまうのではなく、その経験を生かしたその後の生き方を考えるべきだと周りも思うし、本人も思うべきだと感じます。その環境づくりを一緒にしようというのがライツです。具体的にどのようなつながりを持てばいいのか、どのようにメッセージを伝えればいいのか、という疑問を持つ人たちのきっかけづくりを支援しています。それは私自身がしてもらってきたことに対する恩返しでもあります。

アトランタオリンピックの後、カンボジアで行われた義手・義足を必要とする人たちへの支援のためのチャリティレースに誘われ、初めて途上国を訪れました。そこで貧困に苦しむ悲惨な現場と、そのような状況の中でも生き抜いていく生命力にあふれた強さを目の当たりにし、その両面に強い衝撃を受けました。翌年2回目に参加した時には、いい意味で、1回目とのあきらかな違いを感じました。大会には、義足の人たちも子どもも参加できます。この国には、対人地雷で傷ついた多くの人たちがいますが、被害に対して国の援助が受けられない上に、そのような目に遭うのは、自身の前世に原因があるという考え方が根強く残り、世間で虐げられているような状況でした。この大会は、そのような人たちが、がんばっている姿を見せることができる場でもあります。子どもたちにとっても、この大会を励みに練習を行い、生きる力となっていました。たった1つのスポーツ大会で皆がこんなに元気になるのならば、もっと自発的に取り組んでいこうと考えて「ハート・オブ・ゴールド」というNPO法人を立ち上げました。以来、自立支援という分野で活動しています。その中でも特に形になったのが、現地地で5年間やってきたスポーツ指導者育成プログラムの実績が認められ、カンボジア政府からの依頼で、小学生対象の保健体育の指導要領の作成を手伝ったことです。それまでカンボジアには、体づくりに1番大事な時期にある小学生向けの保健体育についての指導要領がなく、自分自身の体や病気のことについて学ぶ機会がありませんでした。2007年にその指導要領は完成し、2008年にはさらに指導書となる予定です。指導書が完成すれば、モデル校に指定された小学校に配布され、実際に先生がそれを使って教育を行うことになります。

選手にならなくても、スポーツをすることで子どもたちはつながり、元気になります。また、その時がんばったという経験が人生を変えるきっかけにも

なります。スポーツを教えることは、その技術以前に、人間が人間力を持って生きていくことを教えるのに1番いい手段だと思います。人とコミュニケーションをとること、健康であること、ルールを守ること、あきらめずにがんばること。生きていくために身につけなければいけないそれらの大切さを、楽しい競技の中で学ぶことができます。人を作る、育てるという面におけるスポーツの重要性や可能性を、もっと伝えていきたいと思います。

私はアトランタオリンピックでゴールした時、「自分で自分をほめたい」と言いました。それは自分が努力してきた過程を、自分自身が1番わかっていたからです。これからも、自分がやれるだけがんばったと納得して生きていきたいと思います。世界にはさまざまな境遇の人たちがいますが、それぞれにチャンスを持っています。男性だから、女性だからというよりも、1人のチャンスを持っている人間として、いろんなことに全力で向かっていって欲しいと思います。誰かや、何かに変えてもらおうと待つのではなく、自分から何かを変えていこうという姿勢が大事だと、私は信じています。

#### 国連人口基金 (United Nations Population Fund)

世界の人口問題の改善と解決をめざす国連の開発機関。設立当初の名称「国連人口活動基金」(United Nations Fund for Population Activities)の略称から、UNFPAと呼ばれている。特に開発途上国の人口問題に対し、各国政府やNGOとともに取り組んでいる。また、人口問題のなかでも、リプロダクティブ・ヘルス(性と生殖に関する健康)、リプロダクティブ・ライツ(自らのリプロダクティブ・ヘルスを守る権利)、女性のエンパワーメントに重きをおいた活動を行っている。

参照 国連人口基金東京事務所 <http://www.unfpa.or.jp>

#### 有森 裕子 Yuko Arimori

元プロマラソン選手。バルセロナオリンピック(1992年)で銀メダル、アトランタオリンピック(1996年)で銅メダルを獲得。現在は、(株)ライツ取締役、NPO法人「ハート・オブ・ゴールド」代表、国連人口基金(UNFPA)親善大使、国際陸上競技連盟(IAAF)女性委員会委員なども務めている。

※本稿は、2008年1月17日に行った有森裕子氏へのインタビューをもとにしたものです。

## スポーツとジェンダー

## 第2回

## ～運動・スポーツ参加に見られる男女差～



京都教育大学体育学科  
教授 井谷 恵子

地域のフィットネスセンターを訪れると、女性はこれほど運動好きだったかと女性比率が高いことに驚きます。ダンスやヨガなどのスタジオプログラムでは女性が大半を占め、おしゃれなスポーツウェアを身につけて生き生きと運動や社交を楽しんでいます。対照的に、男性はトレーニングジムで黙々と走ったり、あえぎながら筋力トレーニングに励む姿が目立ちます。メタボ対策に仕方なく運動を始めた人、サッカーなど集団スポーツは苦手だけれど1人でやれるものならと決断した様子も見取れます。ゴルフやサッカーなど、競争的なスポーツ活動を楽しんでいる男性も多いようです。

運動実施に関する最近の調査（『スポーツライフ・データ2006』笹川スポーツ財団）を見ると、成人の「運動・スポーツ実施率」はここ4年間伸びず、女性の不活発さが際立つ結果になっています。週2回以上活発な運動を継続する「アクティブ・スポーツ人口」は15.9%で男女差はほとんど見られません。一方、この1年間にまったく運動・スポーツを実施しなかった人の割合は、男性27.4%に対し、女性は35.6%と男性を上回っています。「行いたいができない」という不満層も30歳代・40歳代の女性では6割を超えています。

女性の運動・スポーツ離れはもっと若い時期から始まります。中・高校生の運動部参加のデータを見ると、成長につれて女性の運動・スポーツ離れが進みます。高校生ではおおむね男性の3分の2程度の入部率です。高校や大学での体育授業を離れた後、さらにこの傾向が進み、ことに子育てや家事に時間やエネルギーを削がれる年代では落ち込みが大きく、50歳代以降になってやっと取り戻すという状況が見られます。

これらのデータが示すスポーツ・運動参加の男女差異は、身体的心理的特性によるもので絶対的なものでしょうか。また、このような差異は男女それぞれに共通する特徴なのでしょうか。

前述のように、活発な運動を継続的に行っている集団に男女差は見られません。また、非実施者の差も小さいとは言えませんが、8%程度で、むしろ「やりたいけれども実行できる環境が整わない」という状況が読み取れ

ます。逆に、男性にも女性と同様の傾向を持つ人が少なからず存在することが読み取れます。

運動の内容についても、男性はスポーツやトレーニングを好み、女性は競争や激しい運動を好まないと一概に言うことはできません。近年の女性のスポーツ進出を見れば明らかで、レスリングや柔道などかつては男の領域とされたスポーツで女性が活躍しています。このところ人気のボクササイズなど格闘技系の動きを活用したエクササイズでは、男女を問わずパンチ、キック、掛け声と威勢よく運動しています。その一方で、シンクロナイズドスイミングなど女性中心に発展したスポーツ種目への男性進出は非常に低調です。フィットネスセンターでもヨガやエアロビクスなどに参加する男性は少数派で、遠慮しながら女性に混じっているという状況です。

前回の記事で、近代スポーツは男性らしさを育てる教育機能を期待されて発展してきたこと、競争や「筋肉重視・脂肪排除」という特徴を備えていることに触れました。現在、学校体育を含め社会に普及しているスポーツも同様の特徴を持っています。一方、女性に人気の種目であるヨガやダンスなどは、他者との競争ではなく自己の身体との対話やシェイプアップ、表現が基本コンセプトです。勝敗や記録といった外面的な出来栄よりも、体の調子を内観すること、苦しさ<sup>くろしみ</sup>に耐えてがんばるのではなく、適度な運動強度や爽快感<sup>さうかつかん</sup>を味わうことが重視されます。

つまり、子どもの頃からの運動経験が競争的スポーツ活動中心であるため、多くの女性はそこに居場所がないことを実感するのです。無意識的に、男女それぞれに期待される運動・スポーツ活動を感じ取ることもあるでしょう。このことは、スポーツにおける能力や志向に大きな男女差があるというよりも、男女が経験するスポーツ自体がジェンダー化された文化であり、その偏った土壌で男女の差異を実際以上に大きく見ているということになります。この文化の中で苦勞<sup>くろう</sup>しているのは、参加率の低い女性だけでなく、ダンスやヨガなど競争的スポーツとは異なる世界へ入ることを躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>している男性なのかもしれません。

(財)アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) 理事長 吉崎 邦子

第52回国連女性の地位委員会（以下「CSW」という）は、2008年2月25日から3月7日まで約2週間ニューヨークの国連本部で開催されました。KFAWは、2002年に国連の経済社会理事会のNGO協議資格を取得し、毎年CSWに参加しています。日本女性監視機構（JAWW）によると、今年のCSWには、各国政府代表団以外にNGO代表2千人弱（日本からは18人）が参加したそうで活気のある会議でした。私はわずか3日間しか政府間会議の傍聴とNGOのワークショップに参加できませんでしたが、以下は、その報告と帰国後入手したCSWの合意結論について簡単にまとめたものです。

## 政府間会議

CSWの委員国である45カ国の政府代表が協議する政府間会議の開会式で、潘基文国連事務総長は「女性に対する暴力は容認できるものでも、許されることでも、耐えられることでもない」と、女性に対する暴力終結キャンペーン（2015年まで）を宣言するとともに、各国代表に女性に対する暴力が犯罪であるとした法律の制定などを求め、メディア、男性指導者、女性グループへ呼びかけ、協力を要請しました。



▲潘基文国連事務総長

第52回CSWの優先テーマは、「ジェンダーの平等と女性のエンパワーメントのための資金調達」でしたが、「資金調達」とはJAWWによれば、「お金の流れ」ということになります。世界的に見れば、女性はまだまだ国などの公的機関や民間組織の財政の恩恵を男性と同等には享受していないという現実をふまえ、男女共同参画を推進し女性のエンパワーメントのために効果的なお金の流れや使い方を検討・実施しようというものです。これ以外にも重要課題として、女性に対する暴力や、気候変動とジェンダーなどさまざまなテーマの会議が行われていました。



▲政府間会議の様子

帰国して2月28日の目黒依子CSW日本政府代表のステートメントや3月11日に公表された資金調達に関する合意結論をCSWなどのサイトで簡単に入手でき、世界をつなぐ情報の同時性に感激しました。目黒代表は、ジェンダー平等な社会を作るにはあらゆる政策・意思決定段階への女性の参画が必要であり、また結果に結びつく資金調達の仕組みの改革が重要であると強調するとともに、男女共同参画社会を推進するにあたっての日本の課題とさまざまな施策と取り組みについても述べています。

政府間会議の合意結論は、北京宣言と北京行動綱領の重要性をふまえ、ジェンダーの平等を達成するにはジェンダーの主流化が重要となること、具体的には国の経済政策・戦略・計画などを企画・実行し、それを監視・評価・報告するすべての段階にジェンダーの視点を組み入れること、また経済制御過程に女性の参画を増やすことなどを盛り込むとともに、たくさんの具体的な取り組み事例を提示しています。

## 活気のあるNGOのワークショップ

政府間会議とは別に、国連ビルの前のチャーチ・センターでは連日たくさんのNGOプログラムが並行して行われており、私が出席した「少女・女性に対する暴力」「財政とジェンダー」、「第5回世界女性会議を実現しよう」と題するワークショップやパネルディスカッションは、国連本部でのフォーマルな会議とは違って、たくさんの質問や提案が飛び交い聴衆との一体感のあるとても親しみの持てる会合でした。ここで各国NGOの女性たちと情報や名刺を交換しネットワークへの一歩を踏み出して帰国しました。

## 懸命に生きる人びと～日本人こそ学んで欲しい

(財) アジア女性交流・研究フォーラムは、NPO法人ユニフェム日本国内委員会に正会員として参加するとともに、日本国内の9つの地域委員会の1つであるユニフェム北九州地域委員会の活動を支援することで、開発途上国の女性の生活向上と自立に貢献しています。今回、ユニフェム北九州地域委員会の主催で、NPO法人アジアチャイルドサポート代表理事の池間哲郎さんをお招きし、講演会を行いました。アジア各国の極度の貧困地域に、撮影や支援のために足を運んだ池間さんの実体験に基づくお話は、いわゆる先進国に生きる私たち日本人にとって、衝撃的な内容でした。



▲講師の池間哲郎さん

日本の子どもたちに「あなたの夢はなんですか？」と尋ねてみたとしても、プロスポーツ選手や芸能人、デザイナーやパイロットなど、さまざまな答えが返ってくることでしょう。しかし、池間さんがフィリピンで出会った子どもの夢は「大人になるまで生きること」カンボジアで出会った子どもの夢は「お腹いっぱいご飯を食べること」だったそうです。今の日本の子どもたちは、食べ物を大事にしないとされます。小中学校の給食現場を訪ねてみると、凄まじいばかりの残飯。しかし同じ地球上で池間さんが見たものは、1週間も食べ物を口にすることのできなかつた親が自分の子どもを捨てるモンゴルの現実であり、家族が餓死するほど追い詰められる中で、親を助けるために売春婦として街に売られるタイの女の子たちでした。カンボジアの貧しい子どもたちにとって1番安い食事は、パンやラーメンの半額で空腹を忘れさせてくれるシンナー。モンゴルのマンホールの中で暮らす子どもたちにとって恐ろしいほどの空腹を紛らわす手段は、ボロ布や新聞紙、ダンボール紙を口いっぱい詰めて飲み、かみ続けることだそうです。

学校教育という言葉聞いた時に、私たち日本人がイメージするのはどのようなもののでしょうか？9年間にわたる無償の義務教育、鉄筋コンクリート製の校舎、公立学校の施設を管理するのは、当然地方自治体の仕事です。しかし、ミャンマーの教育制度は日本とは全く違い、校舎を建設するのは住民の務めです。住民が

お金を出し合い校舎を建設して初めて、行政が教師を派遣してくれ、学校が機能し始めるのだそうです。教育の重要性は痛いほど分かっているけど、現金収入などほとんどない村の人びとにとって、子どもに教育の機会を提供することがいかに困難なことか、容易に想像できようというものです。池間さんは、このような地域に学校を建設する事業を行っておられます。完成した小学校で学ぶ子どもたちのまなざしは真剣です。小さな弟や妹の面倒を見ながら勉強する子どもたちも少なくありませんが、その小さな弟や妹でさえも、騒ぎもせず、居眠りもせず、じっと授業が終わるのを待っているそうです。

池間さんの衝撃的な話を聞いて、会場には涙を流す人も少なからずいらっしゃいました。しかし、一番心に響いたのは、池間さんが最後におっしゃった言葉ではなかったのでしょうか。「最も大切なボランティアは自分自身が一生懸命に生きることです」池間さんが全国を講演してアジアの子どもたちの惨状を訴えて回るのは、かわいそうな彼らを助けて欲しいとお願いするためではありません。一生懸命に生きることの大切さを彼らから学んで欲しいからだそうです。どんなに苦しくても、どんなに辛くても一生懸命に生きる子どもたち。例えその生活の場所がゴミ捨て場であっても、マンホールであっても、一生懸命に生きる。今の日本で豊かさゆえに失われた自立心や親への感謝の心、真剣に生きることの大切さ。「日本の子どもたちにこそ、厳しい環境に生きるアジアの子どもたちから多くのことを学んで欲しい」という池間さんの言葉をかみしめた講演でした。



▲講演会の様子

(財) アジア女性交流・研究フォーラムが、独立行政法人国際協力機構九州国際センターから委託を受けて実施している「環境と開発と男女共同参画セミナー」の2006年度修了生であるブランコ・サマヨアさん。日本での研修を終えて1年以上経った彼女が、現在、日本で学んだことを生かしながらどのような活動を行っているかのレポートを送ってくれました。

### 生物多様性の保護活動

ビクトリア・ビルマ・ブランコ・サマヨア（ペルー）

私が勤務しているグリーン・ペルーは、ペルーの動植物を保護し、地元住民とともに持続可能な開発を行うための調査を実施することを目的に設立されました。特に、ペルー南東部にある熱帯雨林は、世界で最も豊かな生物多様性が見られ、ユニークで手付かずの自然が残っている地域であるため、この地域の保護に力を入れています。

そのプロジェクトの1つとして、熱帯雨林保護を目的に、民間の篤志家からの支援を得て土地の買収を行っており、現時点では、4,500haの土地を所有しています。その保護地域には、アンデスのイワドリの生息地が含まれています。イワドリは、ペルーの国鳥でもある美しい鳥です。他にも、メガネグマやサルなど希少な動物も生息していることから、貴重な動物の宝庫である森を、木材の伐採業者や入植者から保護する必要があります。



▲ペルーの国鳥イワドリ

野生生物のすみかを保護するための資金を確保し、同時に持続可能な経済活動を行うために、私たちは、保護地域でのエコツアーを企画しています。管理人のいる生物観測施設を保護地域内に設け、ペルー内外の生物学者が動植物の観察をしたり、保護活動を調査したりするために、宿泊ができるように取り計らっています。また、イワドリのレック（オスが交尾のためにメスを誘う場所）を観察するための場所も設置しました。

1996年以来、イワドリを観察したいという、さまざまなグループの観光客が来訪しています。観光客は入場料を支払って、オスがメスにアピールする様子を、

7～8m離れたレックの観察場所から眺めることができます。広いアンデス山中でも、燃えるように鮮やかな赤のイワドリが数多く集まるのを、これほど容易に観察できる場所は他には無いため、このレックの見学は、生物学者、観光客、国内外の報道関係者の間で有名になっています。

また、環境への影響を最小限に抑えたエコツーリズムのプログラムを開始し、1996年に建設した、より大きな生物観測施設をその拠点の宿泊所としても使用しています。さらに、このプログラムを推進し、その売上を自然保護活動の資金とするため、私たちは「インカ・ナチュラル・トラベル」という旅行代理店を設立しました。私たちが目指しているのは、観光を通して自然保護を訴えることであり、この代理店が、訪れる観光客や仲介業者に私たちの目的を話し、自然保護を広める役割を担っています。

今年、私たちは新たな植林プロジェクトの計画にとりかかりました。これは、保護地域近くの土地に、近隣のコミュニティと共同で植林を行うものです。そのためには、コミュニティの住民を対象に、植林用の苗を育てる温室を建設する訓練を行う必要があります。また、植林には、果樹やその他の有用な樹木を選定することで、コミュニティが経済的な恩恵を受けられるようにと考えています。

私たちが行っている熱帯雨林の保護活動は、多くの人びとの暮らしの向上や将来に向けての水源林の確保、二酸化炭素の排出削減とそれにとりもなう地球温暖化の抑制、生物多様性の保護など多くの目的を持っています。たった1haの土地を使って私たちが実施しているエコツーリズムは、4,500haの森林の保護と環境への影響を最小限に抑えることに貢献しているのです。



▲保護地域内の熱帯雨林

その他のレポートはウェブサイトに掲載しています。http://www.kfaw.or.jp/about/about04-01.html

## ガード下から—インドネシアの路上生活の子どもを教育する

グロリア・アーリニ (シンガポール)

路上生活の子どもは、インドネシアでは見慣れた光景です。都市中心部の信号のある交差点あたりをうろつき、たいてい手製の簡単な楽器を手にして、インドネシア歌謡曲の歌詞を少し外れた音程で歌い、わずか100ルピア(約1円)ばかりのチップをもらう姿をよく見かけることでしょう。高級車が渋滞で停車すると、持ち主が気づかないふりをして座っている快適そうな車内を、憧れの目で窓からのぞいて見つめるだけで満足したりしています。

2003年現在、インドネシア社会福祉局が確認している国内の路上生活の子どもの数は約5万人です<sup>1</sup>。この大半は、学校教育を受けさせることのできない貧困家庭の子どもです。インドネシアには9年制義務教育制度があり、指定校に低所得家庭の児童を対象にした資金援助権を付与する学校運営支援策も最近導入されたのですが、路上生活の子どもたちは正規教育を敬遠し、路上にとどまります。

その理由はさまざまです。一部の子どもはプンガメン(路上アーティスト)のような金儲けという、より現実的な活動のほうを好んで学校に行かなくなります。また、自尊心を傷つけられるのがいやで、学校に行かなくなる子どもたちもいます。路上生活の子どもたちは、自分が、学費全額を支払っている生徒たちとは別の世界に住んでいるのだと考えています。社会から見放された存在であることや、貧しい身の上、将来が見えないことが一体となって社会心理学的な壁を形成し、他の「普通の生徒」のように通学することをやめてしまうのです。その結果、学歴のない路上生活の子どもたちは、路上生活ゆえの危険にさらされやすくなり、児童人身売買、売春、麻薬売買その他の犯罪のえじきになることも少なくありません。

リアンとロッキーという50代の双子の姉妹は、この貧困の悪循環を断ち切るため何かしなくてはならないと感じました。彼女たちの発案で、路上生活の子どもたちに教育を受けさせるため、北ジャカルタのラワ・ベベックのガード下にカルティニ緊急事態学校が建設されました。「緊急事態」という言葉は、インドネシアの路上生活の子どものひどい教育状況を描写するのに実にふさわしい

表現です。ガード下に住む人びとのみじめな貧しさと、10歳の幼さですでに売春している子どもたちのことを知って、リアンとロッキーはがくぜんとしました。裕福な家柄の姉妹は、社会から取り残されたこれらの子どもたちに何らかの形の教育を施したいと切望しました。

全ての費用が、リアンとロッキーの個人的な蓄えだけでまかなわれているカルティニ学校は、現在国内にある多くの近代的で最先端に行く学校とは全く違います。ベニヤやダンボールなど、間に合わせの材料を使って建てられ、外観はラワ・ベベックのガード下に建っている他の粗末な住まいにそっくりです。学校が路上生活の延長線に入り込んだようで、路上生活の子どもたちは居心地のよい路上を離れる必要もなく、教育を手に行うことができるようになりました。近隣の350人の子どもたちが熱心にカルティニ学校に通う気になったのは、気安さ、親しみやすさといったもののおかげでしょう。学校では、すぐに「双子のお母さん」として知られるようになったリアンとロッキーから、教育、制服、教科書、文房具が無償で提供されています。

その質素な外観とは裏腹に、カルティニ学校はそこで学ぶ子どもたちの人生に大きな変化をもたらしました。開校後、2000年には認可され、ジャカルタにさらに4校の分校が設置されましたが、その資金の大部分はリアンとロッキーの私財があてられています<sup>2</sup>。全校で、小学校から高校レベルまでの合計2千人近い子どもたちが教育を受けています。今では、技術の進歩に遅れないよう、授業でコンピュータを使うことさえ始めています。

リアンとロッキーの2人の女性は、慈善事業を通じて、インドネシアの無学な浮浪児の人生を大きく変えました。彼女たちは、子どもを学校に行かせるのではなく、文字通り教育を家庭に、また家庭を持たない子どもにまで近づけることで、インドネシアの正規教育の定義を変えてしまいました<sup>3</sup>。20世紀初頭に女性教育のさきがけとなった、インドネシアの英雄的女性カルティニにちなんで命名されたカルティニ学校は、今日の社会の恵まれない人びとに、教育の手を差し伸べています。

1 この数値はおおよその推定で、「路上生活の子ども」の定義によって数値も変わってくる。

2 姉妹の個人資金が中心ではあるが、さまざまな方面やスポンサーからの援助や寄付も受けている。

3 インドネシア政府も路上生活の子どもに教育を受けさせることを目指して、立ち寄りセンターや児童のための友だちキャンパスのような、試験プログラムを導入している。

## リーダーシップ発揮へ向けたウガンダ女性のエンパワーメントと奨励

ナマエンディ・グレイス (ウガンダ)

ウガンダでの英連邦首脳会議(CHOGM)の開催にあたり、政府は、女性を積極的に登用し、意見を尊重しました。このように女性が登用されるようになったのは、人権擁護の女性グループがウガンダ社会における女性の地位を徐々に向上させてきた成果です。

今後も、特に、へき地農村部に暮らす貧困層や障がいをもつ女性の人権のために戦う必要があります。こういった女性たちは弱くて顧みられない存在ですが、中には、機会さえ与えられれば指導力を発揮できる人たちがいます。彼女らは学校に行かせてもらっていません。また、障がいをもつ女性の周囲には、最低限の必需品や、慰めも励ましもありません。条件は備えていても、要職に就いたり、結婚したりする機会が閉ざされています。女性自身が社会の中での自らの権利や、責任、重要性の理解にもっと敏感にならなくてはなりません。そうすることで自信や自尊心の形成につながり、ひいては社会でリーダーシップを発揮する結果へつながっていくのです。

政府は、すべての国民に初等教育から高等教育まで、あらゆるレベルの無償教育を導入して女子にも教育を受ける機会を与え、その進捗状況を見守っていく必要があります。また、村レベルから国家レベルまで、一般の人びとに女子教育の重要性を意識させることも必要です。まったく無学の者が指導者になるのは無理です。女子にも教育の機会が与えられれば、社会のあらゆるレベルでもっと多くの女性指導者が生まれるでしょう。

女性が起業能力を身につけ、収入創出活動を開始・維持し、融資を受けるために、マイクロおよびマクロの融資制度の利用法を学ぶプログラムはありますが、国民、特に女性が少額の融資を受けるためのプログラムには、政府はこれから着手しなければならない段階です。どのレベルにせよ、極貧状態で指導力を発揮するのは無理です。これからは女性も収入源をもつ必要があります。これが実現すれば女性はあらゆるレベルで指導者層に加わることができるでしょう。

## インド農村女性が先進国女性に提供できるもの

チャタジー・公子 (インド)

西ベンガル州西部の乾燥地域、バンクラ県にあるシムールベリア村は戸数47戸、サンタル族と呼ばれる少数民族の村です<sup>1</sup>。2003年にNGO団体DRCSC (Development Research Communication and Services Centre)の農村コミュニティ活動の1つとして、この村に女性グループが作られました。約200人の村人のうち、母親を中心とした26人の女性がメンバーとして参加しています。他の少数民族の村と同様、女性の識字率は州平均よりも低く、20%<sup>2</sup>にも達していません。NGOと共同でコミュニティ活動を展開するためには、こういったグループには少なくとも中学卒業程度の教育を受けた人材が最低2、3人は必要ですが、このグループではリーダー以外はやっと自分の名前が書けるかどうかの状況から始まりました。

2006年からは横浜にある女性NPOが、この村の多目的教育活動を支援してくれることになり、女性メンバーとの交流を行っています。村の女性たちは、はるばる日本の都会から足を運んでくれる訪問者たちに、自分たちの活動を見せる機会があることを喜んでいました。村の生活は確かに厳しいですが、彼女たちはそれを口実にはしていません。毎月30ルピー (約100円)の個人貯金に加えて、地域の小学校の給食作りや借り入れ田での共同稲作など、メンバー全員の働きによって得た収入を共同貯金しています。個人が必要な場合は、この貯蓄から決まりに基づいて融資が受けられます。また、食糧不足に備えて、米の備蓄も共同で行い、余剰が出ればそれを売って貯金にまわすこともしています。こうして貯めたお金で、多目

的教育活動の拠点となる土地も、女性グループ、日本の支援団体、DRCSCが共同で購入しました。農繁期の時は途切れがちで、電気が通っていないために夜集まって勉強することまではできませんが、夕方には週3回、識字クラスも行っています。

このような状況を理解した日本の女性たちが「彼女たちから学びたい」と言うことは意味のあることです。シムールベリア村はほんの1例に過ぎませんが、インド各地の農村で同じような努力をしている女性グループは数多くあります。経済的にも豊かで、十分な教育もある日本の女性たちに、彼女たちが提供できるものがあるとすれば、インドのような途上国といわれる国に付された、ステレオタイプ化した貧困のイメージを違った角度で見ようとする姿勢かもしれません。彼女たちにそんな大げさな意識はありませんが、同じ地球の片隅で行われている小さな努力がお互いの地域コミュニティ活動に生かせるようになるには、先進国の女性たちにもその必要性を感じ取ることができる能力と学びが必要とされています。

1 戸数などの基本データはDRCSCのフィールドワーカーが女性グループと一緒に調べたもの。

2 Development and Planning Department, Govt. of West Bengal, Human Development Profiles 2007, West Bengal, 2007 参照



◀プロジェクト視察の訪問で村を訪れた日本の女性たちと話し合いを持つ村の女性たち



## 第18期海外通信員を紹介します

(財) アジア女性交流・研究フォーラムでは、アジア・太平洋諸国を中心とした海外との幅広いネットワークを形成するために、1991年から海外通信員制度を設けています。

今期は、13カ国から18人の応募があり、9カ国9人の皆さんに通信員をお願いすることとなりました。今期を含め、これまでの通信員は34カ国延べ236人となりました。

このネットワークを通して、各国から最新の情報をお伝えします。

### テーマ 女兒に対するあらゆる暴力

2007年の第51回国連女性の地位委員会は「女兒に対するあらゆる形態の差別及び暴力の撤廃」というテーマで開催されました。女性・女兒に対する暴力について、国連は1993年に「女性に対する暴力の撤廃に関する宣言」を採択しています。女性に対する暴力は、殴打、レイプ、性的虐待、セクシャル・ハラスメント、人身売買、強制売春、女性器切除といった女性に有害な伝統的慣習などを含み、身体に対するものだけではなく、性的、心理的なものなど多様な側面をもっています。中でも女兒は、低年齢であるがゆえに特に弱い立場に立たされています。

現在の世界の流れとしては、女兒の権利に配慮する方向に動いてはいます。しかしながら、依然として男児が重用されることで、満足な教育や福祉が与えられず、ひいては経済的自立の機会から疎外される女兒がまだまだ数多く存在することも事実です。このことは、社会や生活に重要な影響を及ぼす意思決定に女性が関わることができず、結局は何も改善しないという悪循環につながっています。

このような状況を打破し、女性と男性が同等の権利と機会を与えられる世の中にしていくために、まずは各国や地域における現実を認識することが必要です。その1つの資料として、各国の海外通信員の皆さんに、それぞれの国や地域の女兒がさらされている暴力について、具体的な事例を交えながら、それらを撤廃するための取り組みなどについてレポートしてもらいます。

#### パキスタン



テリーム・ハサンさん

2つの修士号を取得し、さまざまな機関で教育者やトレーナー、専門家を務めてきました。今はパキスタンの高等教育機関(HEC)で専門家として働いています。また、専門学校を設立し、10歳から20歳までの学生に教育やカウンセリングを行っています。

#### ブルキナファソ



ヴォクマ・ジョセリンさん

歴史や文化人類学を学び、ジャーナリストや教師、人権アドバイザーとしての経験もあります。現在は女性推進省で事務局長として勤務しています。昨年に引き続き、通算3期目の海外通信員を務めます。

#### インド



ミータ・シンさん

地域保健と公共政策に携わる医師として働いています。感染制御学を専攻し、軍隊で務めた経験もあります。現在は地域で「女兒の尊厳プログラム」を主宰し、男児選好を防止して女兒が尊厳を持って生きていけるように活動を行っています。

### フォーラムの窓

#### アジアの女性をタバコ産業の被害者にしてはいけない

2008年3月日本学術会議は、国際社会での体面を保ち2005年にたばこ規制枠組条約(FCTC)に署名・批准しておきながら現実にタバコ対策をなかなか進めない日本政府に要望「脱タバコ社会の実現にむけて」を提出しました。段階には、「勧告」「要望」「声明」「対外報告」とあり、勧告が出された前例がごく限られていることから、要望が極めて段階の高いも

のであると言えます。国連開発計画(UNDP)が毎年発表する人間開発指標(HDI)では、日本は今年も世界8位でした。主たる構成指標の平均余命、識字率、就学率、経済成長率などが世界のトップクラスでありながら、総合順位がトップにならないのは、ジェンダー平等の遅れが足を引っ張っていると議論されましたが、喫煙率の高さも足を引っ張っています。

世界のタバコは、疫学、医学、心理学、教育学、経済学、政策、産業、貿易などさまざまな分野から興味深い事例研究のテーマとなりますが、ジェンダーからも重要

## 中国



大浜 慶子さん

中国留学で日中女子教育の比較研究を行い、教育学博士号を取得しました。現在は中国の政府機関で外国人専門家として働く一方、中華女子学院の客員研究員として、日中をつなぐさまざまなプロジェクトや共同研究に携わっています。

## ネパール



ブハワナ・ウパデヒアユさん

貧困者救済機関のプログラムマネージャーとして、ジェンダー平等と開発における社会問題に関連するプログラムの計画、展開、実施を行っています。以前は国際水質管理研究所でジェンダーおよび水、貧困分野の研究員として働いていました。

## フィリピン



徐 華偉さん

大学で経営学や社会文化心理学を学び、現在は事業を営んでいます。芸術分野にとっても興味があり、作曲やギターやキーボードなどの楽器の演奏が趣味です。一方で、バスケットボールや水泳なども楽しむスポーツマンです。

## スリランカ



カンティ・ウイジェトゥンガさん

現在は、石油・石油資源開発省の次官補です。以前は女性問題省の女性局長で、ジェンダー平等の問題や、ジェンダー平等のための開発プログラムなどに取り組んできました。また、国家レベルでのジェンダー専門家として、女性・女兒に対するあらゆる形態の差別の撤廃についての国の政策形成に携わった経験もあります。

## シンガポール



グロリア・アーリニさん

シンガポールに住むインドネシア人です。シンガポール国立大学の修士課程で社会学の研究をしています。特に移民や移住、人種や宗教などの分野に興味を持っています。昨年に引き続き、通算3期目の海外通信員を務めます。

## カンボジア



テイアン・モニーさん

カンボジアの若者や農村部の貧困者に、生活上の機会を提供するNPO「AAfC / JRfC」という組織で、教育プログラムの指導教官として働いています。女兒や女性に教育の機会を与え、人身売買や性労働、性搾取の被害者とならないようにすることが主な仕事です。

な様相を示します。世界中で喫煙者は圧倒的に男性に多かったのですが、健康志向の高まる中、先進国の男性における喫煙率はむしろ下降してきました。いわゆる発展途上国で問題が大きいと報告されていますが、先進国においても発展途上国においても女性の喫煙率は上昇しています。これまでのマーケットでは消費が下がったタバコ産業が新たなマーケットとして人口の多いアジア地域のこれから長年にわたって喫煙してくれる若者、そしてまだ比較的喫煙率が低いために拡大が望める女性に焦点をあてたアグレッシブなマ

ーケティング戦略を展開しています。

世界保健機関（WHO）では、タバコ会社やタバコ会社系列からの寄付金は、一切受け取りません。今年初めの中国の冷凍餃子事件で、日清食品も日本たばこ産業（JT）との冷凍食品事業の統合を取りやめました。消費者も食の安全だけでなく、製造会社の倫理を問いながら、選択をしていくべき時代です。

九州大学大学院言語文化研究院・人間環境学研究院・アジア総合政策センター准教授（財）アジア女性交流・研究フォーラム客員研究員 大谷 順子

# INFORMATION

## アジアの風景

～読者から寄せられたアジアの人びとの生活を紹介します～

### お茶の香りに誘われて（中国）



明の時代に作られた巨大な庭園「豫園」は、上海の有名な観光名所の1つです。それを取り囲むように、多くの商店が所狭しと立ち並んでいます。ちょうど新年のお祝いも重なって、多くの人が行き来している中、表通り

の騒がしさとは無縁であるかのように、ひっそりとたたずむお茶屋さんが目に留まりました。あたりに漂う香ばしいお茶の香りに誘われて店の中に入ると、その棚には、さまざまな種類のお茶が陳列されていました。店員の女性がいてくれたおいしいお茶をいただきながら、しばしのお茶談義に花を咲かせました。

(写真提供 北九州市 筧 雅貴)

## 出版物のご案内

### 『アジア女性研究』第17号 —福祉とジェンダー—

福祉分野の研究、実践、政策について、ジェンダーの視点から分析した論文を掲載しています。また、山田昌弘氏の巻頭言、アジア女性の動向や事情、KFAW研究員の報告、フォトエッセイ、書評なども収録されています。

■ 1冊1,000円(税込み、送料別途実費)

#### 購入、お問い合わせは

(財)アジア女性交流・研究フォーラムまで

E-mail: research@kfaw.or.jp

Tel 093-583-3434 Fax 093-583-5195

※代金は、銀行振込みでお願いします。

## 第19期海外通信員募集

(財)アジア女性交流・研究フォーラムでは、アジア・太平洋地域諸国との幅広いネットワークを形成し、交流を図るために2009-2010年の海外通信員を募集します。

- **募集人員** 9名
- **任期** 2009年5月～2010年3月
- **応募資格** 日本語か英語でその国の状況をレポートできる人(応募レポートを含み年3回、国籍・性別は問いません。)アジア・太平洋地域諸国(日本を除く)在住者を中心に採用します。
- **応募方法** 次の書類を(財)アジア女性交流・研究フォーラムに提出してください。

#### ① 応募レポート

テーマ 「あなたの日常生活—服装について」

字数 日本語1,200字または英語700words以内

※通信員に採用された場合、第2回は「食生活につい

て」、第3回は「住環境について」のテーマでレポートをお願いします。それぞれ、インターネットやその他メディアから得ることのできない、生活に密着した情報を、具体例を交えて報告してください。

- ② **応募申込書** ウェブサイトからダウンロードできます。
- ③ **写真** レポートの内容に関する写真を1枚以上添付してください。

- **謝礼** 1レポートにつき8,000円
- **応募締切** 2009年2月27日(金) ※当日消印有効

詳細はウェブサイトにも掲載しています。

ご不明な点は(財)アジア女性交流・研究フォーラムまでお問い合わせください。

表紙写真「山村の子どもたち」(ブータン)撮影者 阿部 治

ヒマラヤ山脈の南側に位置する国ブータンは、単なる開発ではなく、すべての国民の「幸せ」を増加させることを国家の使命とする「国民総幸福量(GNH)」という考え方で有名です。美しい棚田を背景に、ゴヤキラという、どこか日本の着物にも似た民族衣装を身にまとった子どもたちの笑顔は、私を幸せな気持ちにさせてくれました。



財団法人 アジア女性交流・研究フォーラム

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4 北九州市大手町ビル3F

TEL (093)583-3434 FAX (093)583-5195

E-mail: kfaw@kfaw.or.jp URL: http://www.kfaw.or.jp

